

結

絞首台の鐘が、からころ鳴っています。
処刑された遺体が、風にあおられて揺れているのです。

「……私が殺したようなものだ」

あなたはずっと、後悔していました。

自らの発言が、疑いあいの席が設けられるきっかけになったと。
そのせいで、お互いを傷つけあう場が生まれてしまったと。

あなたは、人間でないものに投票したはずでした。
人間の境界を定義して、人間でないからと処刑を行いました。
でも、今になって思うのです。

時間の長さの違いこそあれ皆、今まで同じ場所に生活していました。
この話し合いが起こるまで皆、よき隣人であったのです。

その隣人たちのいずれかが、人の定義から弾かれるべきなど。
果たして神ならぬ身に言えることなのでしょうか？

「はは……、このような罪深い身で、よくも自らは人だと言えたものだ」

あなたの悔恨は、もう取り返しがつきません。
いつかまた旅に出るその時も、この罪だけは手放せないまま
ずっと抱えていくしかないのでしょうか。

+++++

END-M-2：『懷疑の帰結』